

平成30年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 大場 健哉

喜多方市の教育長に就任して、初めて小学校農業科作文コンクールの審査に参加いたしました。どの作品も、農業科の学習を通して、気付き、考え、実感したことが素直に表現されている力作揃いで、子どもたちの豊かな感性と確かな成長にたいへん感動いたしました。

今年は、市内全小学校十七校の三年生以上、千四百七十名の児童が、小学校農業科の学習に取り組み、総数千四百二十七点の作品応募がありました。この作文コンクールを一人一人の学びを振り返る一つの機会と捉え、読む人の心に響く作文が書ける子どもたちに導いてくださっている全小学校の先生方に改めて敬意を表します。また、小学校農業科の運営にあたり、親身になってご指導いただきました各小学校農業科支援員の皆様をはじめ、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立耶麻農業高等学校様等々、多くの関係機関の皆様のサポートとご協力に対して心から感謝申し上げます。

今年度は、特に「総合的な学習の時間」に位置付けている本市の農業科の意義を再確認し、各教科や領域の学習内容と農業科の内容をリンクさせて、知識や技能が「使える形で身に付く」ようにするための取組の工夫をお

願いしてきました。そして、この作文募集の際には、新たに「学びの広がり」という観点を加えました。「豊かな心の育成」「社会性の育成」「主体性の育成」をねらいとする本市の農業科が、さらにステップアップする一年となつたと言えましょう。

また、この十年を超える農業科の実践が、あらゆる分野の方々の目にとまり、今年も全国各地から多くの視察や取材を受けました。これは、農業科の活動を通して、子どもたちが人間としてよりよく生きるための多くの気づきがあることや、社会全体が抱える課題解決へのヒントがあると評価してくださる方がたくさんいらっしゃるということです。私たちは、ますます自信をもって、農業科を発展させていきたいと心を新たにすることができました。本来であれば、応募いただいた皆さん全員の作品をご紹介しますところですが、大賞を含む入賞者四十五作品の掲載とさせていただきます。ぜひ、多くの皆様にこれら成果のたくさん詰まったこの作品集をお読みいただき、感動を共有いただければ幸いです。

おわりに、ご多用の中ご寄稿いただきました関東学院大学教授の佐藤幸也先生、慎重に審査をしていただきました審査員の皆様方に心より感謝を申し上げますとともに、今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。作品集発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

寄稿

「AIを包み込む農業科で育成される二一世紀の学力

高度情報社会を乗り越える」



関東学院大学理工学部 教授 博士 佐藤 幸也

一 高度情報社会の中の子育て、親育ちの難しさ

米国のレーガン大統領以来本格化した情報社会化は、世界の隅々に影響を与えています。今日では幼児でさえも簡単に操作できる手軽なコンピュータが身近になりました。未来学者A・トフラーがサード・ウェイブ（第三の波）と呼んだ以上に社会が変化しています。世界中に情報があふれていますが、本物の情報は一部の人々に握られており、普通の人々がそれらを使い回すことはできません。私たちのほとんどは情報に踊らされています。つまり、人々はケージの中で飼われているのと同じようになりつつあります。「1%の金持ちと99%の貧しい人々」となり、地方などが限界集落になっていく、ということの要因

はここにもあるのです。これは、現代のソフトな奴隷制度のように見えます。中村桂子先生が「(カネの)株より(畑の)蕪」が教育には大切と言った理由はここにあるのです。日本中でカネとモノと便利さを追求していますが、本当の豊かさは人と人がお互いを思いやり、大切にしあえる家庭や地域社会を作りあげる責任を果たし、次の世代にバトンを渡していくことにあります。

このため、EU諸国などでは、子どもたちをテレビやパソコン、携帯電話などから切り離し、できるだけ自然の中で育て、良いものを食べさせる工夫をしています。質の良いゲームなどは、人間の心を壊します。欲深く、人を疑い、他者を攻撃するようになります。いじめを増やす要因にもなるのです。ですから、思いやり、協力、我慢すること、粘り強く考える、人のいやがることをしない、困っている人を助けるなどの人間の善(良さ)をしつかり身につけるため、自然の中や農業の教育が重視されるのです。「スマホを捨てよ」(英国)です。

電源を入れキーを押せば用がたせるというのは異常な世界なのです。過度な便利さは、人間の能動性を奪います。自分の頭で考え必要な行動を起こすことが必要なのです。これはAIには

できません。人間はある対象に意図的ないしは無意識に働きかけ、その反応や成果を自分の中に取り込み成長します。農業科で考えてみましょう。農作業は手足を器用にし、身体を丈夫にしてくれるほか、作物が上手く育っていないときは「どうしてだろう?」と考える力、科学的な思考力・学力を育てます。高度情報社会というのは便利ですが、人間の能動性を奪い、他人任せになる怠けもの、無責任な人をたくさん生みだしてしまします。人間として当たり前に育つことが大変困難になるのです。だから、日本でも一流と言われるような小中学校などでは、わざわざ高いお金をかけて農村体験をさせています。その舞台として人気があるのは喜多方です。皆さんはそこで農業や環境、農村を学んでいます。

二 「野菜は作るものではなく、育てるものだ」(小林芳正)

「命の支えあいと愛情の受け渡し」

この言葉に感動した作文がありました。支援員さんや家族、友達と協力して作物を育て、収穫し、一緒に食べる喜びが作文にはあふれていました。農業科は、関係する人々が人間力を発揮する場を作り、大きな輪の中で子どもが育つ役割を果たしていることが分かります。つまらない情報に振り回されず、貴重な

体験に基づいた本物の知性が育っています。愛情豊かで思いやりにあふれた大人たちの中で育つ体験を子どもたちがしているからです。そして、他人の流した汗や涙、笑顔の理由を子どもたちが理解しています。さらに、自然を相手にじっと我慢して、どうすればいいのか考え続け、作物の生命力を信じ、いろいろ工夫したり作業を続けたりしています。科学的に考えていることが作文から読み取れます。子どもたちが豆や稲の育つ姿を見ているときは植物学者であり、害虫やクモなどを見ているときはファールブルになります。知らなかったことを分かったという喜びにあふれた文章にするときは、ジャーナリストや詩人になります。身体をいっぱい使って田植えや稲刈りで汗を流すとき、喜多方の大地は祝福してくれ、それを分かち合います。二世紀は持続可能性が教育目標ですが、それを支えるのは人です。未来を担う人間性豊かな子どもたちがその主役なのです。AIにはできないことです。地球の未来のために、AIを使いこなす前に育てるべきは、支えあう協同と道徳を基盤にした科学的学知性です。農業科の本質です。

入 賞 作 品

目次

【大賞】

農業の知恵のつまった言葉から

駒形小学校 五年 大石 舞花 12

農業科で学んだ気持ち

関柴小学校 四年 小関 春陽 15

大豆を育てたよ

関柴小学校 三年 松浦 直輝 13

伝統野菜のバトンタッチ

慶徳小学校 六年 長谷部 歩 16

大豆の成長の力強さと美しさ

塩川小学校 六年 平宮 蒼唯 14

【優秀賞】

命の強さ

塩川小学校 四年 古川 栞 17

本当のぜいたく

第三小学校 三年 若菜 陽愛 18

大好きな農業

山都小学校 四年 橋本 和磨 18

ジャガイモは、ひみつがいっぱい

第二小学校 三年 赤城 皇征 19

のうぎょう科の楽しさ

姥堂小学校 三年 渡部 天斗 20

あずきが変身

熱塩小学校 五年 瓜生 駒子 21

田んぼで新発見

駒形小学校 五年 尾崎 美青 22

「いただきます」に心をこめて

豊川小学校 六年 遠藤 柊矢 23

私の感謝の気持ち

高郷小学校 六年 長水 咲樹 24

大切に守っていききたい農業科

堂島小学校 四年 佐野 潤也 25

【農業科賞】

はじめてきなこ作りをしたよ

第一小学校 三年 小林 夏樹 26

のうぎょうの大へんさ

豊川小学校 三年 吉川 日彩 27

作物を大切に

加納小学校 三年 園部 ゆめ 28

カボチャの成長

塩川小学校 三年 山口 詩乃 28

野菜を育てる

高郷小学校 三年 小林 愛奈 29

大好きになった農業科

慶徳小学校 四年 柳沼 璃杏 30

農業への感謝

熱塩小学校 四年 上野 陸空 31

さつまいもの生きる力

塩川小学校 四年 塚原 千穂 32

一生けん命育てた大切な野菜

姥堂小学校 四年 中川 穂乃佳 33

一つぶ一つぶの大切さ

高郷小学校 四年 秋山 陽 34

米作りを体験して

第一小学校 五年 齋藤 詩 35

食べ物の命に感謝をしよう

第二小学校 五年 佐竹 華凜 36

お米を作る大変さや苦労

第二小学校 五年 大森 和佳奈 37

作物を育てて感じた大変さ

第三小学校 五年 羽入 結音 38

農家の人への感謝

関柴小学校 五年 高橋 魁 38

農業がつなぐ喜び

関柴小学校 五年 伊藤 里世 39

協力してできた米作り

熊倉小学校 五年 齋藤 光 40

笑顔をもらった赤飯配り

加納小学校 五年 荒川 叶翔 41

一つ一つに「心をこめて」

堂島小学校 五年 羽藤 夕愛 42

米づくりをやってみて分かったこと

高郷小学校 五年 佐藤 叶汰 43

四年間をふり返って

第二小学校 六年 久家 千夏 44

えいきょう力のあつた農業科学習

松山小学校 六年 加藤 愛梨 45

初めての脱こくから学んだこと

上三宮小学校 六年 渡部 咲良 46

支援員さんありがとう

第三小学校 六年 小野寺 璃來 46

農業で生かせること

関柴小学校 六年 遠藤 南未 47

たくさんの方に支えられた農業科の学習

熊倉小学校 六年 高畑 綾佳 48

芳正さんの大事な言葉

熱塩小学校 六年 高橋 颯 49

二回目の興味

駒形小学校 六年 大西 奏唯 50

みんなと協力して作ったスイカ

山都小学校 六年 斎藤 楓華 51

農業科を体験して学んだこと

高郷小学校 六年 清野 咲希 52

編集後記

53

【大賞】



農業の知恵のつまった言葉から

駒形小学校 五年 大石 舞花

私たちが稲作体験をするときはいつも農業科支援員の方々が何人も来てくださっていました。そして、作業について教えてくださったり、はげましの声をかけてくださったりしていました。

いつも通り楽しみに田んぼに出かけたある日、私は農業科支援員さんがおっしゃったある言葉が強く印象に残りました。それは、

「精農、草を見ずして草を取る。」

という言葉です。雑草は、大きくなってから取るのではおそい。大きくなってふえる前の小さいうちから取った方が良いという意味だそうです。私は、この言葉を聞いて、

（物事はなんでも早いうちにやった方がいいということもふくまれているのかな。たくさん経験があるからこそ、こういう言葉が出てくるんだなあ。）

と思いました。農業科支援員さんは、稲作の技術を教えてくださいたださるだけでなく、こんな素晴らしい言葉まで、教えてくださいくださったので、とても感心しました。だから、私は、その言葉を聞いてから、育てた稲への栄養を雑草にうばわれてほしくなかったので、一本残らず全部ぬいてしまおうと、やる気スイッチが入りました。そして、どんなに小さな雑草でも、残しておかないぞと思って、ころばしの他に自分の手で、しっかり取りのぞきました。

学校へもどる途中、私は、またその言葉を思い出しました。この言葉に出会えたのは、たくさん経験を積んだ農業科支援員さんのおかげだと思いました。昔から農業をやってきた方の知恵をお聞きすることが出来て、私達は幸せなんだと深く感じました。そして昔から農業をたくさん経験して、様々な知恵を身につけたものをこうして私たちに教えてくださるというのは、本当にありがたいことだと思います。だから、この言葉を忘れず、たくさん教えてくださいだいた技術の一つ一つや稲に対する情熱の大切さを心にきざんで、来年の稲作体験に活かしたいです。



大豆を育てたよ

関柴小学校 三年 松浦 直輝

僕達、関柴小学校の三年生は、今年初めて農業科に取り組みました。僕達は大豆を育てることにしました。

五月、大豆の種をまきました。農業支援員さんにまきかたを教してもらいました。一つぶずつ土の上に置き、優しく土をかけました。

「これからの世話が大変ですが、がんばってください。雑草との勝負が待っています。」

と支援員さんが言いました。僕は、（がんばるぞ。）と思いました。

六月、支援員さんが言った通り雑草が生えてきたので、みんなで必死でぬきました。めんどくさかったけど頑張りました。そして、ついに大豆が発芽しました。六月に発芽するなんてびっくりです。僕がハウセンカを育てた時は、

一か月で発芽しなかったからです。僕は、五年生のお兄ちゃんが、

「植物が発芽するときは、水、空気、発芽に適した温度が必要なんだぞ。」

と、言っていたのを思い出しました。僕達がまいた大豆は、僕達がちゃんと水をやったこと、優しく土をかけたので空気にふれていたこと、そしてちょろいあたたかさがあったから発芽したんだと思いました。

七月、本葉が出てきました。本葉は、子葉より大きくてちくちくしていました。理科の勉強で、本葉が出てくるとどんどん成長することを学習したので、大豆も同じなんだと思いました。大豆の本葉はハウセンカの本葉より大きかったです。それからが大変でした。大豆がどんどん大きくなるのと同じくらいに雑草がどんどん伸びてきました。僕は、（何回生えてくるんだよ!）と思いました。何回も雑草をぬきました。本当につかれました。

九月、ついに大豆ができました。僕は、（すごい！やった!）と思いました。一つぶの種を発芽させ大きく育て、たくさん大豆をみらせることができました。これから学校にある石うすを使ってきなこにしておもちにつけて食べる予定です。とても楽しみです。



大豆の成長の力強さと美しさ

塩川小学校 六年 平宮 蒼唯

私は穀類を育てたことがない。穀類を代表するものそれは大豆である。大豆は納豆、みそ、豆ふなど身近な食品に使われている。姿を変え私達の食卓に並ぶ大豆が、どのように育つのかを学習できたのが今年の農業学習だ。

種まきは初夏に行われた。ふわふわの優しい土をポットに入れ種を数つぶまいた。そして土の中で温められている種の成長を待った。発芽まで鳥に食べられない様に、カバ―をかぶせて種を守る工夫を先生から教わった。農業は注意しなければならないことが多く、色々と工夫されている事を知った。毎朝観察するのが日課となったある朝、ヒョロヒョロとした小さい芽が土をおし上げ顔を出していた。私は胸が高なるぐらいうれしく大切に育てようという目標ができた。芽が少しのび育つころ、畑に植えかえる作業が

行われた。その苗からどのように大豆が実るのか、成長が待ち遠しくて、ワクワクした。真夏の太陽の下でグングン育つ大豆。ところが今年はまだ暑で雨が降らず節水が求められていたので苗が大丈夫か心配だった。ある日近くを通ると強い日差しの下、小さなスイトピーのような可愛らしい花が咲いていた。天候に負けず咲く小さな花の力強さを感じた。その花が咲き終わるとサヤがふくらみ枝豆として食されるらしい。そして肌寒くなってきたころ畑へ収かくに向かうと完全に葉は落ち、きれいな花を咲かせていたあのころと比べると、全くちがう光景を見せた。毛に守られたサヤをゆするとカラコロと音を立て大豆が収かくを待っていた。収かくした大豆を手のにのせるとピカピカと光りその姿はまるで真珠のようだった。そして天候に負けない大豆の強さを感じた。大豆は畑の肉と呼ばれるほど栄養が豊富と言われている。体づくりにはかせない食材であり、その恵みで人は生きている。

私は三年間の農業学習で、自然の恵みに感謝して命をつなぐ大切さを学んだ。人は色々なものに支えられて生きている。その学びを私は今後の人生の中で生かしていこうと思う。



農業科で学んだ気持ち

関柴小学校 四年 小関 春陽

私は、一年間の農業科で、落花生を育て、農業の大変さを学びました。その中で、分かったこと、考えたこと、感じたことが、二つあります。

一つ目は、農作業の楽しいところと、大変なところです。農作業は、楽しいところがたくさんあります。例えば、友達との観察です。

「見て！あんなに葉が大きく育ってるよ。」

「こっちは、花が咲いてるよ！」

と、友達と観察することで、発見が多くなり、暑い日でも楽しく観察をすることができます。楽しいことはまだまだありますが、ぎやくに大変なこと、つらいこともあります。大変なことは、暑い日の草むしりです。とても暑く、時間がかかるので、みんなの口数もへってきます。でも草はよ

うしやなく生え続けるので、草むしりはやらなくてはならない仕事です。つらいことは、せっかく育った落花生をカラスに食べられてしまうことです。大変なことをがんばってやったのにと、つらくなります。

二つ目は命をいただくことです。農業科でも、道德でも学びました。ぶた肉や牛肉になる牛やブタは、生きています。生き物だけではなく、野菜も生きています。私たちは、日々の中で命をいただいているのです。私は、好ききらいで食べ物を残してはいけないと思いました。なぜなら、命をむだにしているだけでなく、せっかく大変な作業をしたのに、暑い中や寒い中での、努力がむだになってしまうからです。それに、もし、私が農家さんなら、せっかく作った農作物を残されてしまったら、くやしいです。その気持ちを農業科で学びました。

これからは、農業科で学んだ気持ちをわすれず、なるべく食べ物を残さないようにしたいです。



伝統野菜のバトンタッチ

慶徳小学校 六年 長谷部 歩

「伝統を受けついでいるんだ」と私は農業科で玉ねぎを植えている時に気づきました。

「慶徳玉ねぎ」はその名前の通り、私の住んでいる、慶徳町の名前がついた玉ねぎです。ふつうの玉ねぎより甘味が強く、生で食べてもおいしい野菜です。

慶徳玉ねぎは、「伝統野菜」と言われています。それは昔からの種を代々受けついでいるからです。お店で売っている種をまくのではなく、慶徳町の畑でとれた慶徳玉ねぎからできた種をまくのです。だから「伝統野菜」なのです。でも私は別の意味で「伝統」を感じます。それは、玉ねぎ植えと玉ねぎ収穫が学年をまたぐことです。

毎年秋に五・六年生が支援員さんが育てた苗を植えて、次の年の七月ごろに収穫しています。このように新しい六

年生に受けつがれています。まるで、リレーで次へ走る人にバトンタッチする時のバトンのように思いました。だからこの玉ねぎは小学校の伝統も受けついでいるはずです。

収穫祭の日が来ました。私の手のひらにおさまらないくらい玉ねぎは、いろいろな料理に変わりました。私の一番のお気に入り、とん汁です。玉ねぎの甘みが出ていて、とん汁との相性がとてもいいのです。私は周りの友達がおいしそうにおかわりしている姿や笑顔を見て、慶徳玉ねぎを作って心からよかったと思いました。おいしいものを食べたときの笑顔が心に残りました。

私は農業の勉強をして、作物を育てるむずかしさを学びました。また、ボランティアで教えてくださる支援員さんへの感謝の気持ちや収穫の楽しさも実感しました。

私は六年生なので農業科の学習は終わります。しかし玉ねぎを食べるたびに「伝統をバトンタッチ」することの大切さを思い出すような気がします。

【優秀賞】

命の強さ

塩川小学校 四年 古川 葉

「やったあ。」

と、みんながおで、大きな大きなさつまいもを持ち上げました。今年の春から大切に育てたさつまいもがりっぱに成長したのです。

春、ひよろつとしたさつまいもの苗を折れないようにそつと植えました。あまりにもたよりなさそうな苗で、きちんと育つのか心配でドキドキしました。

夏、とても暑い夏で雨がふらない日が続き、かれてしまわないのか心配だったので、夏休み畑を見に行きました。すると、植えた時の苗とちがい、太くたくましく育っていたので安心しました。農業科支援員のすがや先生が、水やりや草むしりなどをして下さったおかげなので感謝したいです。

秋、いよいよ待ちに待ったしゅうかくです。みんなで力を合わせておどろくほど夏より長くのびた重いつるを運びました。友だちのHくんは、頭につるをのせて、

「見て、長いかみよ。」

と言って童話に登場するラップンツェルのように、つるをかみに見立て、わたしたちをわらわせてつかれもふきとびました。

どろだらけになった足でふんばり大きなさつまいもや小さなさつまいもをほりました。まわりには、ミミズやよう虫などたくさん生き物がいて、びっくりしました。虫たちもさつまいもを食べに集まって来たのかなと思い、それほど安心、安全なさつまいもができたのだとかく信じました。

家には二本のさつまいもを持ち帰り、私のリクエストでさつまいもスティックを作りました。

「おいしすぎるー。」

家族全員に大人気であつというまになくなり、私はうれしく、作って良かったと思いました。

この農業科学習で学んだ事は、自然の中で、ひよろつとした苗がたくましく育ち、日照りにも雨にも風にもたえ大きく成長する命の力強さです。その力をいただき私も強くなります。

本当のぜいたく

第三小学校 三年 若菜 陽愛

「ぜいたくな事は、高級な物を食べることではない。本当にぜいたくなのは、自分で作物を作って自分で食べることだ。」

この農業科支えん員さんの言葉が強くのこっています。

だから、私は一生けん命作物を育てました。

三小では、しゅうかく祭で食べる、里芋、長ネギ、大根、白菜を三ヶ月六年生で協力して育てました。

まず、里芋。一番最初に植えた野菜です。親芋を植えて、どんどん大きくなりました。今年は雨が少なくて水やりを何回もしました。葉がふえ、くきが太くなったとき、うれしかったことをおぼえています。

次に、長ネギ。一本の苗をならべて植えました。しばらくして様子を見たら、太くなっていて、すごいなと思いました。

それから、大根。赤い種を二つぶずつまきました。その二つぶから芽が出たので間引きをして一本にしました。（あんなに小さい種から、そんなに大きくなるの？）と思います、びつくりしました。

最後に白菜。二枚の子葉の苗を植えました。植えたとき、（この苗が本当に白菜の苗？）と思いました。その小さな芽が、日がたつにつれてどんどん白菜の形になっていきました。

これらの育てた作物は、しゅうかく祭のときに芋煮にしておいしくいただきました。どの作物もおいしくできてよかったです。

農業科の学習を通して分かったことがあります。それは、どの作物もすがたをかえるということです。初めは小さな苗や種だったのに、しゅうかくするころには大きな作物になっています。（命ってすごい。）と思いました。

しかし、それは作物だけではありません。植物や動物、魚、そして私たち人間もそうです。小さくても大きく育つということは、すばらしい力だと思います。

これからも、農業科支えん員さんの言葉を大切に、一生けん命取り組みたいです。

大好きな農業

山都小学校 四年 橋本 和磨

ぼくには好きな授業が二つあります。一つは図画工作科で、もう一つは農業科の授業です。農業科の好きなところは種をまいたり苗を植えたりすることと水やりや草むしり、こやしをあげてちゃんと世話をすると作物が出来ることです。

今年の農業科の授業では、ポップコーンと、とうもろこしと大豆を育てました。クラスみんなと種まきや水やり、草むしりなどを協力してがんばりました。夏休みには宿題で作物の観察と草むしりがあったので、お母さんと一緒に畑に行きました。とうもろこしは、何かの動物にかじられていました。ぼくががっかりしていると、

「むらさきの花がさいているよ。来てごらん。」

とお母さんが言うので見てみると大豆のくきのところに小さな花がさいていました。

「きれいだね。大豆の花はこんな色をしているんだね。」

と、お母さんと話しました。すごく暑かったけれど草むしりもがんばりました。雨がふらなかつたのでかれるか心配だったけれど、秋にはちゃんと大豆がしゅうかく出来ました。

十一月になると、大豆の選別をするために、農業しえん員さんが、とうみという昔の道具を持ってきてくれました。

上から大豆を入れて横についているハンドルを回すと、風をつくって、ゴミと食べられる大豆を分けてくれる道具です。これであつという間に大豆の選別が出来ました。

「今年大豆はかんそうが早くて良く出来ているね。」と、しえん員さんがほめてくれたのでうれしかったです。

ぼくのゆめは農家になることです。学校でしえん員さんたちと一緒に作業をすることで、いろいろなことを教えてもらっています。これから農業のことをたくさん覚えていきます。そして、大人になったらしえん員さんのようにみんなに幸せをあげる人になりたいです。

ジャガイモは、ひみつがいっぱい

第二小学校 三年 赤城 皇征

「早く育たないかなあ。」

九月にみんなでポテトパーティーをしました。ジャガイモをゆでる時あまりにおいがして、おなががへつてきました。

ぼくは、三年生になってはじめてジャガイモを育てまし

た。二年生でうえたサツマイモはなえだったけど、ジャガイモはイモを半分にした物をうえました。そして、サツマイモの葉はねていたけど、ジャガイモは、ぴいんとまっすぐ立ってました。

うえ終わった時、ぼくがしえん員さんに、

「水やりは、やるんですか。」

と聞いたら、しえん員さんが、

「やりません。」

と言い、なぜやらないのか理由を聞いたら、

「ジャガイモに水分が八十パーセントあるから、水やりはしません。」

と言われて、はじめて知つてすごいなあと思いました。

もう一つおどろいた事があります。六月のはじめに、しえん員さんが土よせをしてくれました。なぜ土よせをしたかというと、

「ジャガイモは太陽に当たると、どくを作りはじめるからです。」

と言ったので、びっくりしました。

六月後半ごろには、花がさいたのでみんなでかんさつしました。花の色はうすいピンクで星が集まってるみたいできれいでした。

夏休みになってジャガイモをぬいた時、いっぱいねっこについていて、すぐ育つていてうれしかったです。

ジャガイモが出きたので、ゆでて食べました。皮をむいたら、白いつるつるの雪玉みたいにきれいでした。食感がやわらかくてホクホクで、ほったが落ちるほどおいしかったです。自分たちで作ったのが世界一です。

ぼくはジャガイモを育ててみて、しえん員さんからこんなおいしいジャガイモが作れるひみつをたくさん教えてもらいました。ぼくもやさしく教えられる人になりたいです。

のうぎよう科の楽しさ

姥堂小学校 三年 渡部 天斗

ぼくは、のうぎよう科がとても楽しい。楽しい理由は二つある。

一つ目は、みんなできよう力して活動できるからだ。今年、エダマメの実がたくさんできた。それは、みんなで分たんして水やりなどをしたからだと思う。だからこれらののうぎよう科活動に生かし、野菜を育てていきたい。

それに、きょう力を他のことにも生かし、生活していきたいとぼくは毎日思っている。

二つ目は、野菜が少しずつ育っていくすがたを、見るのが楽しいからだ。のうぎよう科の時間や、マラソン、水やりをする時には、実の大きさ、葉の数、くきの長さをかならず見る。図かんや本で調べ大切なところだけメモをする。体調が悪かったり、足がいたかったりすると、水やりがめんどくさくなってしまうが、ぼくはのうぎよう科がすきだから、ぜったいにあきらめない。そんなところで、あきらめるようでは、のうぎようをやるしくなどない。だから、がんばるんだ。

来年は、上級生になり、下級生に教えるがわになる。だから、先生に言われたことだけでなく、自らそっせんして調べたり、きいたりして、のうぎよう科の楽しさ、おもしろさ、ふしぎなどを知り、下級生に教え、おぼえてもらい、きょう力して、野菜を育てていきたいと思う。

しゅうかくはとてもつらいが、自分で育てたと思うと、がんばれる。そして、味はとてもおいしい。だからこそ、のうぎよう科が楽しくなり、あきらめないぞ。という気持ち広がる。みんなで作れば、かならずうまくいく。と、しんじて、のうぎよう科をやらなければ、全然楽しくなん

てないと思う。一年生のときはそうだったが、二年生のときから、こう思うようになった。だから、しんじてぼくはのうぎよう科をつづけたいんだ。

四年生になっても、この思いを心に強くのこし、今年のことを生かして、がんばるぞ。

あずきが変身

熱塩小学校 五年 瓜生 駒子

今年の農業科では、心に残ったことが二つあります。

一つ目は収穫祭です。

熱塩小学校では、学習発表の後に収穫祭を行います。全校生で育てたもち米で、もちをつきます。そのもちを、あんこもち、汁もち、きなこもちにします。それを農業科支援員の方やお客様、おうちの人たち、先生方、全校生で食べます。

一番最初にあんこもちで「いただきます」をします。あんこは、五年生が育てたあずきで、五年生が先生と一緒に作ります。あずきは、やわらかくなるまでとても時間がかかりました。こげないように注意しながら一生けん命作り

ました。あんこもちを食べてあちこちから、

「おいしいあんこだ。」

「うめえあんこもちだ。」

といった聞いてきました。そのとき私はとてもうれしくなりました。みんなの顔をみたら、にこにこ笑顔でした。それを見て、私は、今までもちの中であんこもちは苦手でした。けれど、自分たちが育てたあずきで作ったあんこは、すごくおいしいと思いました。

もう一つは、笑顔の赤飯届けです。五、六年生が民生委員の方に教えてもらいながら赤飯を作り、一人分ずつパックにつめて、一人ぐらしのお年よりの方に届けに行きました。私がおばあちゃんに書いた手紙を読んでから赤飯を渡しました。赤飯を受け取っておばあちゃんが、

「ありがとう。」

とやさしい笑顔で言ってくれました。わたしはとてもうれしかったです。自分たちが育てたあずきがあんこになり、赤飯になったりして、みんなを喜ばせることができてよかったです。

笑顔の赤飯届けを通して、よりよい社会をつくるために、私にもできることがあることに気づきました。これから、社会に役立てるようがんばります。

田んぼで新発見

駒形小学校 五年 尾崎 美青

『メタンガス』って何それ。」

と、私は、田の除草をしていた時に、おどろいてとなりの友だちと顔を見合わせたのを覚えています。農業科支援員さんは、このガスのことを分かりやすく話してくださいました。

メタンガスは、苗の根に、悪いえいきょうがあることがわかりました。メタンガスは、前の稲の切りかぶやわらがくさってしまい、その時に、うまれてしまうそうです。だからメタンガスをぬいた方がよいのです。

私は、土の中でそのようなガスができて、苗の成長に係するなんて考えてもみませんでした。白くて細い根は、土の中の栄養をきゅうしゅうするのは、わかっていたけれど、土の中にあるのは、良い物ばかりではないことにおどろきました。そして、苗が元気に育つために、土は大事なんだと思いました。

また、私たちは田んぼの中のガスをぬく役目をしていて知っておどろきました。

田んぼの中をころばしで除草するのと同時に、あちこち

歩きまわると、こんなにいい効果があるのだと思うと、もつと歩いてガスをぬいておいしいお米にしたいと思いました。私は、どんどころばしをおして、いっぱい草を取りました。メタンガスは、目に見えないけれど、足をどろに入れた時に、ブクブクとあわになって出ていくのが分かったので、おもしろくなりました。友だちと、

「右足からも出てるよ。」

「ほんとだあ。」

と、声をかけ合ってできて、楽しかったです。私たちがいっぱい歩けば歩くほど、ガスがぬけて、あわがブクブクとぬけていくのが見えると、ますます楽しくなりました。

今年、稲作体験をしてこのような新発見があって、とても楽しかったです。来年も、どんな稲作のひみつを知ることができるか、今から楽しみです。

「いただきます」に心をこめて

豊川小学校 六年 遠藤 柊矢

「手を合わせましょう。おいしい給食いただきます。」

「いただきます。」

これが、ぼくたちの給食のあいさつです。ぼくは、自分でお米を作るまで、何も考えずに一年生からこの言葉を言ってきました。でも今はちがいます。

四月、種もみまきがやってきました。種もみは、機械で選ぶのかと思ったら、自分たちで水に入れて選ぶことを知りました。田植えも、足や服はどろどろになるし、均等に植えなければなりません。イオン水散布も、ころばしは重いし、イオン水はすごく臭くて、大変でした。稲かりでは、稲をかるのは大変だし、手や首がちくちくしていやな感じでした。ぼくは、一つの作業をするごとに

「はあ、つかれた。」

と必ずのように言ってしまうようになりました。

ぼくたちは、農業科はもちろん、それ以外にも勉強しています。歴史を勉強すると、米作りを日本に伝えたのは、弥生時代の渡来人だということがわかりました。もっと勉強していくと、石包丁で稲をかつたり、そんなに人がいないのにくわで田を耕したりしていることを知ることができました。

「弥生時代の人たちは、ぼくたちより大変な米作りをして、とても苦労して作っていたんだな。」

と思いました。いくら機械があっても、米作りは大変なことなんだと、自分たちで米作りをしてつくづく思います。それは、米作り以外でも同じことだと思います。ぼくたちがいつも食べている野菜も、育てた人が水や肥料の調節をして苦労したものです。ぼくは今まで、何も考えずに食べていました。だからぼくは、これからは心をこめて言おうと思います。農業科の活動は、ぼくに感謝の心を教えてくれたと思います。何気なく言っていた言葉は、明日から確かに変わります。

「手を合わせましょう。おいしい給食いただきます。」

私の感謝の気持ち

高郷小学校 六年 長水 咲樹

私は今年六年生で、小学校で農業を学習する最後の年です。私は今までたくさんの農業にふれてきました。一、二年生の時は、さつまいもを育て、三、四年生の時は、様々な野菜を育て、五、六年生は、米づくりをしました。それらの経験や思い出は、ただ教えられた事をしただけでは学

べないと思いました。自分やみんなと進んで行なった事、収穫した時の喜び、収穫した野菜を料理にして食べた時のおいしさ、このすべてを経験することができたのは、農業科支援員さんや先生のおかげだと私は今でも思っています。そのことが今でも分かるような体験を私は今年しました。それは「収穫感謝祭」の時のことです。私は六年生なので、クラスみんなで豚汁を作りました。ものすごい量の食材を切りました。その時、「この一つ一つの野菜が各学年のみんなや農業科支援員さんたちの思いがこめられているんだから、みんなにおいしく食べてもらえるように私も気持ちをこめて切ろう」と思いました。その後も、自分たちの作ったみそ、育てた野菜が出てくるたびに思いました。そしてついに豚汁ができ、いよいよ感謝祭が始まりました。食べ始めると、ご飯、おいしいねや、豚汁、おいしい、という声を聞いて、自分自身も、「本当に、おいしいな。どうしておいしいんだろう」と思ったほどでした。でもそれはすぐ気づくことができました。それは、育ててくれた人の愛情だということです。私はその日その時から一つ一つの料理にかかわる人に心から自分の感謝の気持ちを伝えたいと思いました。

最後に、私たちが毎日食べている料理はその食材一つ一

つに関わっている人たちの血と汗と涙の結晶です。私はそのことを忘れずに私自身の感謝の気持ちを持ち続けていきたいと思います。この作文を読んでくださっている方もぜひ感謝の気持ちを忘れずに毎日の食事を食べてみてください。

大切に守っていききたい農業科

堂島小学校 四年 佐野 潤也

ぼくは、農業科で、畑より田の方が好きです。田の活動でも、ぼくが一番好きな活動は田植えでした。なぜかというと、田んぼにす足で入ると、足のゆびの間にどろが入って気持ちいいし、自然のすごさや、どろの感じよくがすごく伝わるからです。

今では、全国的に小学校で農業科のじゅ業があるけれど、多くの堂島小学校はおよそ三十年前から農業科の学習があり、しかも堂島小学校では、児童たちが昔から代々受けついできた田んぼもあります。さらに堂島小学校では、収穫した米のだっこくを、昔ながらのだっこく機を使って作業

します。堂島小学校には、堂島フェスティバルという行事があります。その行事で、収穫したもちを、がんばってきねでつきます。ぼくは、小学校に入ってから初めてもちを食べました。ぼくの家では、もちをあまり食べていなかったし、お父さんしかもちは食べませんでした。だから、堂島フェスティバルでもちを食べたことがうれしかったです。しかも、つゆもちがおいしかったので、お正月には、必ずもちを食べるようになりました。

今は、しょう来の夢で、ユーチューバーやゲーマーになりたいという人が多くなっています。それで、農家が少なくなったら、食べる米やもちが少なくなるし、田んぼのすごさや自然のすごい所がなくなってしまう。そうなるなら、ぼくはいやです。だから、ぼくはこれからも堂島小学校の農業科のじゅ業で、農業の楽しさや命の大切さについて学びたいと思います。そして、それらを下学年や将来の子ども達に伝えていきたいと思っています。

ぼくたちのお父さんやお母さんが小学生だった時から代々受けついできた、堂島小学校の伝とうある農業科を、ぼくたちがしっかりと受けつぎ、そして堂島の地に広がる田んぼを、これからも大切に守っていききたいです。

【農業科賞】

はじめてきなこ作りをしたよ

第一小学校 三年 小林 夏樹

「わあ。いいにおい。」

ぼくは、きなこが大好きです。理由は二つあります。一つ目は、あまくておいしいからです。食べると、幸せな気持ちになります。二つ目は、体にいいし、とうにようびょうになりくいと聞いたからです。おじいちゃんか

「きなこは、大豆でできていて、体にいいんだよ。」

と、教えてくれました。だからぼくは、きなこが、大好きです。

三年生になってから、のうぎょう科の学習で、大豆を育てることを知り、ぼくは、

「やったー。」

と、よろこびました。ぼくの大好きなきなこが食べられると、思ったからです。

五月、なかよし山の近くに、大豆のたねを植えました。

「おいしい大豆になあれ。」

ぼくは、そうねがいながら、小さなたねを植えました。

次の日から、大豆の水やりがはじまりました。ペットボトルに水を入れ、なかよし山の方まで持っていくき、毎日、大豆のたねに水をやりました。やつとめが出たら、かれそうになって、ぼくは、あせりました。

「このままかれちゃったら、どうしよう。」

ぼくは、毎日、ひしに水やりをしました。暑い日が続いたので、大豆のめは元気がありませんでした。のう家の人たちは、大豆が元気に育つかどうか、心配しながら育てているんだなあと思いました。

大豆は、かれることなく、しゅうかくの時をむかえました。ぼくは、ほっとしました。一つ一ついいねいにぬき、一こ一こ大事に大豆をとりました。

いよいよ、しゅうかくした大豆できなこ作りをしました。友達ちと力をあわせて、すりばちで大豆をすりしました。さとうをまぜたらあまくておいしいきなこがかんせいしました。今までで、一番おいしいきなこでした。

のうぎょうの大へんさ

豊川小学校 三年 吉川 日彩

わたしのクラスでは、関白大根と、小すず大豆を育てる
ことになりました。

たねを植えたその日から、大根と大豆の事を、かんさつ
カードに記ろくしました。

やがて大根は大きくなり、土から白い頭を出していまし
た。

「ようし！ぬいてみよう。」

けれど、くきはチクチクして、いたかったです。しかも、
大きなカエルが大根の葉っぱの上に乗りました。虫や小動
物が大の苦手なので、すごく気持ち悪かったです。おまけ
に、大根がとても重くて、うでがちぎれそうになりました。

大豆は、なっ豆にするために、さやから豆を取り出すさ
ぎょうをしました。そのために、かわいた大豆のさやを、
はしごにたたきつけました。でも、たくさん大豆をゆか
に落として、ひろうのに、二日間もかかりました。しかも、
ムニョムニョと動く虫もたくさん出会いました。その時
に、わたしは、

（こんなに大へんな事を、畑仕事をしている方は、一人で

やっているんだな。）

と思いました。

そして、しゅうかくさいの日、育てた大豆がおいしそう
になっ豆になって出てきました。大根も、大根の葉っぱと
いっしょにみそしるにしました。とってもおいしかったで
す。あと、大根のあさづけも作りました。少しからかった
けれど、なれてくると、おいしく感じました。

「大へんだったけれど、とってもおいしいね。」

と、友だちと笑顔で話しました。

のうぎょうという仕事は、大へんな事だけでなく、やり
とげたたっせい感があります。そして、のうぎょうは、こ
れから生きていく上で、大切なことを教えてくれる、そん
な仕事だとわたしは思います。

来年ものうぎょう科の学習をやるので、その時は、虫に
も少しはなれて、もつとのうぎょうと向き合いたいです。

作物を大切に

加納小学校 三年 園部 ゆめ

三年生になって、はじめてのうぎょう科で野さいを育ててしゅうかくをしました。

さいしよに教えてもらったのは、じゃがいもの育て方です。じゃがいもは、たねやなえではなく、たねいもでした。たねいもは、切って植えました。切るときは、めを切らないようにしました。植えるときは、めを上にしてうめしました。ひりょうは、たねいもとたねいもの間にまきました。葉と花をとってその次に、ひりょうをまいて土よせをしました。

次に教えてもらったのは、大こんのたねまきと白さいのなえ植えでした。さいしよに、白さいのなえ植えをしました。なえが予想よりも小さくてびっくりしました。土よせのときにちよつとこまりました。なえに土がかぶさりそうだったからです。土がかぶさらないように、やさしくかぶせました。次に、大こんのたねまきをしました。びっくりしました。それは、たねが赤ピンクだったからです。それは、くすりがかかっているからです。私は、赤い大こんだと思いました。大こんの土よせをしました。大こんは、たね

だったので安心して土よせができました。三か月くらいたって大こんのしゅうかくをしました。ぬくときに、なかなかぬけない大こんもあって、三人でぬいたのもありました。大こんを川であらうときに、大こんが落ちないように、いしきしましたが、大こんが落ちてしまいました。仕上げに、大こんをたらいできれいにあらいました。ポコポコしたところ、土がたまっていて、とるのに時間がかかりました。

今かい学んで分かったことは、作物の命です。人間といつしよだとも分かりました。作物も、人と同じで、水をのんだり、ごはんを食べたりすることも生活も人にているところもあると言うことも分かりました。

来年は、作物の命をもっと大切にしてのうぎょうを学びたいと思います。

カボチャの成長

塩川小学校 三年 山口 詩乃

わたしたち三年生は、中央公園の近くの畑でカボチャを育てました。

まず、ポットにたねをまいて、はんどになえを育てました。ある朝、外にポットを見に行ったら小さいめが出ていました。小さいといっても、ホウセンカよりも大きなめで、かわいい形をしていました。なえが八センチくらい育ったら、すがやさんの畑にうつして大事に育てました。農業科の時間にみんなで見に行ったら、新しい葉っぱがどんな生えてきていました。その後、どんなつるがのびて、大きな葉っぱができました。思っていたより、成長が早くてびっくりしました。カボチャの花は、しわしわできれいな黄色です。葉っぱは、チクチクザラザラしていて、たくさん毛が生えていました。つるは、切ってみたら中が空どうでした。

わたしは、今年の夏に枝豆を育てたので、野さいができるまでたいへんだということを知っています。枝豆の根っこには「根りゆうきん」というよいきんがいっぱいくっついていました。カボチャにはくっついていたのかな？そこをもっと調べたかったです。

いよいよしゅうかくです。さいしょは、葉っぱだらけでカボチャが見えなかったのがしまくりました。すると、人の頭よりも大きなカボチャを見つけました。なかなかとれなくて、友達といっしょにやっとりました。きれいな

ふか緑色でとてもうれしかったです。小さいたねからこんなに大きな実ができるなんて、植物ってすごいなと思いました。

このカボチャを使って、茶巾しぼりを作りました。わたしはこれまでカボチャはそんなにすきではなかったけど、このカボチャは特べつにおいしかったです。これからも、もっといろんな野さいを育てて、どんなふうにつかかさつしたり、おいしく食べてみたいと思います。

四年生で育てる野さいのとくちょうもよく調べたいです。

野菜を育てる

高郷小学校 三年 小林 愛奈

今日は、のうぎょう科で育ててきたにんじんをほる日です。おばあちゃんといっしょににんじんをほったことがあるので、ほり方はしっていました。でも、どんなふうに育っているのか心配でした。まわりの土を手でほると、オレンジ色の大きいにんじんが出てきたので、わくわくしました。もっとほってみると、小さいにんじんもたくさん出

てきました。私たちがほったにんじんは、家庭科室のテーブルいっぱいになりました。

ほったにんじんは、しゅうかく感謝祭で使いました。とんじるの中に入っていました。そのにんじんを食べてみたら、しゃきしゃきしていてあまかったです。どうしてこんなにおいしいのかと思って、支援員さんに聞いてみると、「土がいいんだと思うよ。」

と言ってくれました。私は、土じゃなくて大切なのは、ひりょうだと思っていました。でも、たしかに畑に行つて水やりをする時に、土をさわってみました。すると、土がさらさらしていました。少しおすと、クッションのようにふかふかしていました。そういう土に育っているにんじんに、毎日水をあげると、おいしいにんじんが作れるという事を発けんしました。

ほかに、大こんや里いもなどを作りました。どんな野菜でも一番大切なのは土と水です。ひりょうをあげたり、たがやしたりすると、もっとおいしい野菜を作る事ができました。

のうぎよう科のべん強をして野さいを育てることは、とっても大へんな事で、色んな人の教えがあつて、私たちは、おいしい野菜が作れるという事です。

これからも、野菜を育てる時、土もちゃんと見て、水を毎日あげて、大きくて、とてもおいしい野菜を作ろうと思いました。

大好きになつた農業科

慶徳小学校 四年 柳沼 璃杏

わたしたちは、農業科の学習で落花生とポップコーンを育てました。

わたしは、種をまいた時に、初めて知ったことがありました。落花生は茶色だったのにポップコーンは赤色でした。わたしは、なぜポップコーンの種が赤色だったのか、とても不思議に思いました。わたしが考えていると、友達が来て、

「それは、鳥などから食べられないようにするためだよ。」

と教えてくれました。

ポップコーンと落花生を観察しに行った時、落花生に子葉が出ていて、わたしは、

「大きくなってる！」

とびっくりしてしまいました。くきはかたくのびていて、何枚も葉がありました。わたしは、もっともっと大きく育ってほしいなあと思いました。

収かくした日は、ポップコーンが九月四日、落花生が十月二十五日でした。ポップコーンも落花生も、収かくはとも大変でした。ポップコーンは、アブラ虫がついていて、実を取るのが大変でした。落花生は、たくさんだったので、ほりおこしたり実をとったりするのに何十分もかかってしまいました。しかし、班のみんなと助け合いながら作業できました。最後はみんなだろまみれになってしまいました。でも、みんなで協力して全部収かくできたので、とってもうれしかったです。

ポップコーンを調理した時は、とてもおもしろかったことがありました。それは、ポップコーンがはじけた時です。始めは、全然はじけなかったのですが、とても心配になりました。でも、急にはじけ出して、班のみんなは大よろこびしました。食べた時、種をまいたこと、収かくで苦ろうした時のことを思い出しました。

虫がきらいで、農業科は苦手でしたが、活動がとても楽しくて、大好きになりました。

農業への感謝

熱塩小学校 四年 上野 陸空

ぼくは、三、四年生になってからうつのかぶ、大根などを育ててきました。ぼくは、支援員さんたちに、植え方、ぬき方などを教えてもらってきました。

農業でぼくが一番すごいなあと思ったことは、人と人の協力です。ぼくたちが農業をやる時は、たくさんの人が協力してやっています。そのおかげで毎年、毎年おいしい野菜、お米などができます。

稲を植える前に、ねがいをおみこしにはって、「わっしよい、わっしよい。」

と言いながら田の周りを持って歩きました。それから稲を植えます。植えてから、すすく育ってきました。すすく育つ稲を観察しました。すすく育つすがたを見たらとてもうれしくなりました。しゅうかくする時は、五、六年生はかまで稲をかって三、四年はひもでむすんで一、二年生は、三、四年がひもでむすんだ稲を運ぶのをやりました。それも多くの人に協力してもらいました。学習発表会の後のしゅうかく祭の時に食べるのでおいしく食べたいです。協力してくれている人に

「ありがとうございます。」

を言いたいなあと思いました。他の国では、作物を食べられない所もあるのに、作物を食べられて、本当にありがたいと思います。

今、四年生だから、あと二年あるので農業をもっとしんけんにやりたいです。来年、新しい一年生が入ってくるのでやさしく教えて、田植え、種まき、しゅうかくまで一生けん命やって、病気にも負けない、野菜、お米をつくって、支援員さん、みんなとおいしく食べたいです。みんなが、「おいしい。」

と言ってくれるような作物を作りたいです。お米は、たくさん賞をとっているので続けて、賞をとれるようにみんなと支援員さんの人で協力してがんばりたいです。

熱塩小学校は、人が少ないのでみんなと協力しないと大変だから、心を一つにしてがんばりたいです。

さつまいもの生きる力

塩川小学校 四年 塚原 千穂

「さつまいもさんへ

さつまいもさん、元気ですか？雨がふらないので、暑くないですか？

暑いのに土の中でどんどん大きくなっていますか？できるだけ、行けるならわたしも見に行きます。しゅうかくするまで、かれないでください。」

わたしは、夏休みの自主学習でさつまいもに手紙を書きました。なぜ、書いたかと言うと、ずっと雨がふっていないくて、とても気になっていたのでからです。

今年の夏は、とても暑くて水不足だと家族が話をしていました。お父さんは、田んぼの水が足りなくて、朝早くとお昼、そして夕方と夜に田んぼのお水チェックをして大変そうでした。だから、わたしはさつまいものことが気になって、気になってしょうがありませんでした。

お水のことを知ったので、お父さんにたのんで日中ダムに行ったら、いつもある量より少なくなっていたので、びっくりしました。その水の量を見て、さつまいも、あまり取れないのかなと心配しました。八月のおぼんによ

うやく雨がふって、ほっとしたので、秋のしゅうかく日がとても楽しみになりました。

秋になり、葉かたづけをしました。葉を引っぱったら、さつまいもまで取れてしまい、びっくりしました。一回目にほった時よりだんぜん大きかったからです。いもほりは、とてもわくわくしました。土がふかふかでやわらかくて、すが谷先生が一生けん命たがやしてくれたさつまいものとんだと思いました。わたしは、一生けん命ほりました。すると、大きいのが二こ、小さいのが二こ、合計四こ取れました。長太いのや太いのもいっぱい取れました。水不足だったのに、三百こ以上取れておどろきました。作物の生きる力は、すごいと思いました。みんなで育てたさつまいもは、ほっぺが落ちるほどおいしくて、食べたら元気がわきました。

一生けん命育てた大切な野菜

姥堂小学校 四年 中川 穂乃佳

「農業科かあ。なんだかめんどろくさそうだな。」

わたしは、農業科の学習が始まるというとき、そう思った。

わたしの学校では、一年生から六年生まで色いろな野菜を作っている。今年も野菜作りのき節が始まった。わたしのおじいちゃんやおばちゃんも田んぼや畑でたくさん野菜を作っている。毎日大変そうだなと思っていた。わたしは、暑い所にいたり、あせをかいったりするのはとくいはない。これからの活動を不安に思った。

農業科の学習では、すいかやえだ豆、さといもなどを種から植えて育てていくことになった。黒いマルチをはる時には、農業科のしえん員の先生に教えてもらいながら作業をした。植えた野菜の中で、さといもは、どんどん大きくなっていく。安心していたが夏になると、雨がふらなくなり成長が感じられなくなってきた。

夏休みに水やり当番に行くと、虫がたくさんいて草が太ももくらの高さになっていた。最初は、ふかふかの土にかこまれて元気に育っていたさといもは、周りの土がかわいてしまい、葉がかれそうだった。わたしは、急いで水を持ってきて、一つ一つにたくさんあげた。このように何度も畑に行くうちに、だんだん大きくなっていく野菜を見てかわいく見えてきた。

お世話をした分、葉っぱがふえ、きらきらの日光をあび、がんばって大きくなっていく野菜達を見ていくのがとても楽しみになった。

すいかは、実がなるとどんどん大きくなった。しかし、カラスに食べられた物もあった。わたし達は、すいかを守るためにアルミはくで実を包んだり、かかしを作ったりした。大きく実ったすいかは、とてもあまくておいしかった。一生けん命自分達で育てた野菜だからこそ、おいしかった。暑い中、あせをかきながらがんばってよかったと思えた。

一つぶ一つぶの大切さ

高郷小学校 四年 秋山 陽

「今日は新米だよ。」

お母さんが朝ご飯の時に言いました。ぼくは、

「新米って何。」

と聞くと

「今年とれた新しいお米のことだよ。陽君が手伝った田植えの時のお米だよ。」

と言ったので、

「えー、あんなに前に植えたのに、今できたの。」とびっくりしました。

高郷小学校は五、六年生の農業科で米作りを体けんするので、来年の田植えで活かせるように、おじいちゃんの田植えを手伝ってみようと思いました。四月に米の種まきをして、その苗が育ったら五月に田植えをします。朝早くからおじいちゃんとおばあちゃんが田植えをしていたのでばくもお手伝いしました。

まず、ハウスにたくさん並べてある苗の入ったケースを軽トラックにつみます。一枚のケースがけっこう重いので落とさないようにしんちようにゆっくり持つて運びました。つみ終わった苗は田んぼまで運んで、おじいちゃんが運転する田植え機につみます。つむ時も田んぼの土手がボコボコして細い道なので重い苗を運ぶのはとても大変でした。

ようやく田植えが終わった後、おばあちゃんに、

「陽君は力持ちだね。助かったよ。ありがとう。」

と言われて、つかれたけどお米ができるのが楽しみになりました。

それから五ヶ月がすぎて、お米ができるまでこんなに時間がかかることにおどろきました。そして植えた後も田ん

ぼの水を調整したり、じよ草ざいをまいたりたくさんの手入れをしていたことも聞いて、本当に米作りは大変だといふことが分かりました。ぼくは、田植えの手伝いをして米作りの大変さが分かったので、これからは、一つぶ一つぶをよく味わって残さず大切に食べたいと思いました。来年は、学校の米作りをがんばるぞ。

米作りを体験して

第一小学校 五年 齋藤 詩

ぼくは、ご飯が大好きだ。米作りに手間ひまがかかるのは聞いていたけれど、米作りの学習をして初めて知ったことやおどろいたことがたくさんある。

その一つとして、米作りのスタートは、まだはだ寒い三月ごろだということ。六十度ぐらいの熱めのお湯に種を入れて、たつぷり水分をきゅうしゅうさせる。そうして発芽した種を土に植えて温かいハウスの中で育てたものが苗だ。寒い時期に手間をかけることが米作りにとっても大切だといふことを知った。

ぼく達は、苗植えと収かくを体験させてもらったが、ひとつひとついいいに間隔をそろえて植えるのはとても大変だった。足や腰が痛くなり、時間もかかってしまったけれど、おいしいお米ができるようにと一生懸命植えた。それから、同じ気持ちで友達と協力し合って植えることができて、収穫の時がより楽しみになった。

今年の夏はとても暑く、雨が降らない日が続いた。喜多方市は日中ダムの水が減り、水不足となっていたので、ぼくは稲の成長が心配でたまらなかった。今まで農業科の学習をいろいろ体験してきた中で、農作物にとって日光と水は必要不可欠で、特に米は成長していく時期に田んぼにたつぷりの水がないと全てかれてしまう。居ても立ってもいられない、そんな気持ちだった。

十月二十六日、ぼくたちは立派に育った稲を一束一束大切に収穫した。無事に収穫できたのも、ぼくたちが知らないところで、草かりをし、害虫から守り、水不足の対さくを考えるなど沢山の方々の協力があったからだと感謝の気持ちになった。

米は他の農作物よりも長い期間を必要とするけれど、「根気強く、責任感の強い日本人が作る代表的な農作物のひとつだね」と新米をいただきながら家族みんなが笑顔

になった。やっぱりぼくは、ご飯が大好きだ。

食べ物の命に感謝をしよう

第二小学校 五年 佐竹 華凜

今年一年間に農業の学習をして、一番心に残った事は、米作りの学習です。

わたしの祖父母の家は、米作りの農家です。機械で田植えをしている所を見た事がありますが、手で苗を植えた事はありませんでした。しかし、農業の時間に先生が、

「前の時間にみんなでまいた種が苗になったから、次の農業の時間に田植えをしたいと思います。」

と言ってしまったのです。困って急いで家に帰り、祖母に相談すると、

「今週の土曜日から田植えをする予定だから、その時に練習をしてもいいよ。」

と言ってくれました。

土曜日になり、祖母が苗の植え方を教えてくれました。その方法は、苗を三本持ち、三本の指で差しこむ方法でし

た。この方法で練習を続けていたら、だんだん上手くできるようになってきました。

そして田植えの授業の時、祖母に教えてもらったやり方で田植えを行いました。家でやった時よりもスピードが上がっていたし、きれいに植えることができたと思います。しかし、土の中には木の枝や、草がうまっていて足を切ってしまいました。いたかったけど、しえん員さんの話で命の大切さやごはんを残してはいけないということが学べました。

家に帰って農業の時間にあった出来事を、家族に話しました。すると、話を聞いていた祖母が、

「田植えは楽しかったのかな。米だけでなく他の食べ物にも、感謝をすることが大切なんだよ。これからも、食べ物に感謝して食べ物を残さず、好ききらいなく食べようね。」

と教えてくれました。

祖母と行った田植えも楽しかったし、みんなと行った田植えも楽しかったです。これからも、食べ物に感謝をして、ごはんを残さずおいしく食べます。

お米を作る大変さや苦労

第二小学校 五年 大森 和佳奈

「おー、すごい。」

びっくりしたこと、それは、小さな種もみからこんなに大きくなるということだ。風がふくと下を向いてまがっている稲が大きくゆれていた。その種のパワーの力強さに感動した。

米作りの授業の初日、私は初めて米の種を見た。毎日食べている米だけど、お店で売っているところを私は見たことがなかったし、昨年まで育てたジャガイモやヘチマなどの種とはくらべものにならないくらい小さくて、大丈夫なのかなあと心配になった。でもその不安も次の授業でいきにくきとんだ。そこには、緑色の、上に向かってまっすぐにはえている苗があった。支援員の安部さんたちが、種まきをしたあと、土がかわかないように温度や水分を保ってビニールハウスで大事に育ててくださったことを知り、改めて、おいしいお米を作るためには、手間ひまがかかるんだと思った。人の力も育て上げるのには大切なことなんだと思った。

田植えも、手作業で植えた。私は、どろの中に入った事

がなかったもので、初めはいやだったけど、入ってみると、どろの中はあたたかくて平気になっていた。

「線を中心にやさしく植えてね。」

と田中さんが手本を見せてくれた。私もまねをしてそっと植えた。だんだんなれてくると、少し早くできるようになった。今は機械化が進んでいて手作業よりも時間が短縮でき、楽にできると聞いた。そんな中で体験できたことは貴重だと思った。行きたびにくきや葉が育ち、緑色から黄金色になっていくのが楽しみだった。稲かりも、かまをつかってやると、思ったよりもむずかしかった。手を切ってしまうことが怖かったからだ。集中してかると、力がかかり体が痛くなった。

毎日食べている米。お店に行けばすぐ買えるけれど、一から作ることがどれだけ大変か分かった。感謝の気持ちを忘れずに食べたい。

作物を育てて感じた大変さ

第三小学校 五年 羽入 結音

私は、作物を育てて分かったことがあります。それは、土を耕すこと、雨がふっていない日は水をあげること、夏になると多くの雑草を抜くことなど大変な作業がたくさんあるということです。私は、農業科の授業を受けるまでは、当たり前にご飯や野菜を食べていましたが、授業を受けてから、食べるときは手を合わせてしつかり、

「いただきます。」

と言い、食べ終わったら

「ごちそうさまでした。」

と、苦労して作ってくれた人や、育った食べ物にしつかり感謝して食べるようになりました。

また、私たち五年生は支えん員さんの田んぼをお借りしてお米も育てました。私の家は、おばあちゃんにお米をもらっているのです、あるのが当然でした。でも、自分たちで米づくりをしたら、とても大変だということがわかりました。そのとき、「もつと感謝して食べよう。」と思いました。

夏に、おばあちゃんにもらったプランターで、トマトとにらを育てました。水をあげていると、日に日に大きくな

っていきました。でも、と中からめんどくさくなって水をあげない日が四日、五日続きました。すると、にらはしなしなになってしまいました。「毎水をあげていけば、しつかり育っていたかもしれない。」そう思いました。それから毎日欠かさずに水をあげるようになりました。その後、にらもトマトも無事に育ち、おいしくいただきました。

私はこの一年間を通して感じたことがあります。それは、作物は農家の人たちが苦労して作った物で、あるのが当たり前ではない、ということです。たくさんの人が大変な思いをしてやっと作った作物なので感謝していただこうと思いました。

農家の人への感謝

関柴小学校 五年 高橋 魁

「どろどろで、いやだな。」

学校の田んぼで田植えをする前に、ぼくが言った言葉です。小さいころ、おばあちゃんが作っている田んぼに入っ

てみたら、どろどろしていやになったのです。でも、ついに田んぼの中へ。温かくて変な感じでしたが、友達と田植えをしていたら、なんだかおもしろくなってきました。

今年も、農業支援員さんたちが、種まきから、ぼくたち五年生に、教えてくれたので、「米づくり」が楽しみになっていました。農業支援員の菊地さんは、夏休み前に、社会科の「米づくり」の授業で、「米づくり」の工夫や大変さについて、教えに来てくれたこともありました。ぼくが心に残った農家の方の工夫は、いろいろな作業を協力しながら、進めているということ。ぼくも友達といっしょなら、田んぼの中も大丈夫でした。でも、農家の方にも苦労もあるようで、芽が出たら、朝早くから水をあげたりして大変です。ぼくは菊地さんの話を聞いてから、「そうだったんだ。」と米づくりに興味を持ち始め、それからずっと、稲刈りまで楽しみにしていました。

「どうやったらうまく稲が切れるのかな。」

「やっぱり、ゆっくり切った方がいいのかな。」

など、稲刈りの前に自分でいろいろ考えていました。でも、それは、稲を刈ることだけしか考えていませんでした。実際に、やってみると、もちろん稲刈りも大変でしたが、長ぐつが、田んぼのどろにはまり、とれなくなりそうになっ

たり、機械に運ぶために大きなたばをかついだりと、他にも大変なことがたくさんありました。米をつくるには、こんな大変さもあることが、よく分かりました。そして、こんな苦労をしないとできないお米だからこそ、農家の方は、がんばっていることも分かりました。

ぼくは、今度は、おばあちゃんの田んぼにいっしょに入って、手伝ってみようと思います。

農業が つなぐ 喜び

関柴小学校 五年 伊藤 里世

「おいしいね。」

わたしが、農業科で稲を育てその喜びを感じた時でした。自分たちが大切に育てた米が大きく育ち、収穫祭で全校生の「おにぎり」になりました。自分たちが育てたお米でおにぎりを作り、そのおにぎりを食べたみんなの笑顔を見て、とてもうれしくなりました。また、育てたいなという思いでいっぱいになりました。

わたしの家は農業をやっていて、おじいちゃん、おばあ

ちゃんたちが、にらや米、トマトなどたくさんの野菜を田や畑で育てていて、その野菜は、学校の給食の食材にもなります。わたしも時々畑に行って手伝うこともあります。手伝うときは、畑に行くおばあちゃんに付いて行って、野菜の収穫の手伝いをするくらいでした。

わたしたち五年生は、今年は、学校の田んぼに苗を植え、自分用にペットボトルにも稲の苗を植えて、夏休み中も観察しました。見なれている稲ですが、少しずつ苗が育ち、やがて穂が付いたときは思わず、

「やった。」

とうれしくなりました。学校の田んぼでは、みんなで育てている苗がどんどん育ち、稲刈り、その後の収穫祭が楽しみになってきました。

また、今年は、米づくりだけでなく、子ども園の年長さんと五年生でサツマイモを育てました。いっしょに芋掘りをする子ども園の子どもたちも、思っていたより大きなサツマイモで、大喜び。大きいサツマイモは、みんなを笑顔にしました。

このように、米や野菜などの食物が育つことによって、育つてからも、そして、その食物を食べてからもさまざまな喜びがあることをあらためて感じました。来年も、おい

しいお米や野菜を育て、みんなで喜び合えるようにしたいです。

協力してできた米作り

熊倉小学校 五年 齋藤 光

十一月十日に、収かく祭がありました。収かく祭では、私たち五年生が半年ぐらいかけて作ったお米と、全校生が作った野菜が入ったとん汁を食べました。ご飯を食べた時、（え、このご飯、本当に五年生だけで作ったの。）と思いました。みんなが作ったとん汁と五年生が作ったお米が、とても良く合っていたからです。みんなも、

「おいしいね。」

「野菜もおいしいね。」

と笑顔で、とん汁とご飯を食べていました。私は、（みんな、笑顔で食べてくれて、うれしいなあ。）と思いました。また、（田植えでは足にすりきずができたり、かかし作りでは苦労したりしたけれど、上手にできて良かった。）と

思いました。私は、農業科で米作りをしているうちに、今の日本は、とても楽に米作りができるんだなと思いました。なぜなら、今は、種まきを自動でやってくれる機械もあるし、田植え機やコンバインもあるからです。楽に米作りができる今、授業で、米を手作業で作るという体験ができて、本当に良かったです。

今の日本は、外国から少し米を輸入しているので、米だけでも外国から輸入しないようにしたいです。そのためには、自分の家に田んぼがある人は、できるだけ、自分の家で米を作り、日本の米の自給率を上げて、外国から輸入しなくなるようにしたいです。また、米を外国に今よりもっと多く輸出できるようにしたら、とてもいいなあと思いました。

私は、米作りを通して、農業の事だけでなく、社会の事も、少し考えることができたので良かったです。また、今年初めて五年生で米作りをして、とても上手にできたのがうれしかったです。来年も、みんなで協力して米作りができると思います。

笑顔をもらった赤飯配り

加納小学校 五年 荒川 叶翔

ぼくは、初めて米づくりをしました。これまで、六年生に教えてもらったオリエンテーションからフェスティバルのもちつきまで一生けん命、米づくりをしてきました。その中で一番心に残ったのは、この後の作業の赤飯配りです。赤飯配りは、一人ぐらしのお年よりに赤飯を配るという活動です。赤飯は、ぼくたちが作ったもち米で、六年生と民生委員の方々が作ってくださいました。五年生はパックづめから手伝いました。作っている様子は見られなかったけど、ふたを開けてみたらおいしそうな赤飯ができていたので、「きつとがんばって作ってくれたんだなあ。」と思いました。パックづめをするときは心をこめて赤飯をつめ、輪ゴムをし、大切にふくろに包みました。

次に一人ぐらしの方の家に赤飯と、おり紙で折ったつると手紙の入ったプレゼントを配りにいくという活動をしました。ぼくたちは三けんに、赤飯とプレゼントを配りに行きました。チャイムをおすと、一人ぐらしのお年よりが、「はい。」と出てきてくれて、

「こんにちは。加納小学校の五・六年生です。ぼくたちが作ったもち米で赤飯を作りました。どうぞ、おいしく食べてください。」

と言つてわたすと、お年よりが、

「ありがとう。」

と笑顔で受け取ってくださったので、とても気持ちが明るくなりました。この後行った二けんの家でも、お年よりが笑顔で、

「ありがとう。」

と言つてくださいました。

ぼくは今年の活動を温かい気持ちで終えることができました。来年の米づくりでは、今の四年生をリードして、今年よりも、もっとおいしいもち米を作りたいです。来年は赤飯を作るので心をこめて作りたいです。

一つ一つに「心をこめて」

堂島小学校 五年 羽藤 夕愛

私は農業科活動で特に畑作の活動が大好きです。

今年は会津のきょう土料理のこづゆを作るために、人参と里いもを育てました。人参は、土の上に種をパラパラとまき、種の上にまた土をかぶせました。里いもは、十五センチメートルほどスコップであなをほって、種いもを植えました。私は一つ一つの種に心をこめて、

「元気に育つてね。」

と話しながら植えました。

今年はもう暑だったので、ちゃんと育つか心配でしたが、みんなで協力して水やりをしました。なんとか暑い夏を乗り切ることができました。

二学期に入り畑を見ると、草がたくさん生えていてとてもおどろきました。草が生えすぎると、作物の栄養が草に取られて作物が育たなくなってしまうです。私は草むしりが「めんどくさいなあ。」と思いましたが、人参と里いものために一生けん命草をむしりました。草むしりしたら、人参と里いもがぐんぐんと育ちました。

人参の葉はとてもふさふさになり、里いもはくきがとても太くなっていました。いよいよ収穫の時です。私はすごく楽しみにしていました。人参は、葉と葉がからまっとうまく引きぬくことができなくて大変でした。里いもは、小さいのが多くてあまり収められませんでした。

種をまいて水をあげていれば収かくできると思ったけれど、その年の天気と手入れの仕方で変わるとおばあちゃんに教えてもらいました。野菜作りは大変だと思いました。いつもあたりまえに食べていますが、野菜を作ってくださいる農家のみなさんには、感謝をして食べないといけないなあと感じました。

一つ一つ心をこめて作った人参と里いもを使つて、みんなで作るこづゆは特別おいしいと思います。とても楽しみです。

米づくりをやつてみて分かったこと

高郷小学校 五年 佐藤 叶汰

毎年、ぼくの家は五月になるといそがしくなります。祖父母が農業を仕事にしているからです。そして秋になり、田んぼが黄金色にそまるころ、稲ほが風にゆれるのを見ると、ぼくはいつも早く自分で米作りを試みたいと思うのです。

五年生になって、農業科で米作りをすると分かった時、

ぼくは、ようやくその時が来たと思いました。米作りの最初は、手作業の田植えです。ゆっくりゆっくり田んぼに足を入れていくと、どろの中は思ったよりも温かく感じました。そして、なえを植えると、すぐに横にたおれてしまいました。どうして立たないのかと、少しこまっていると支えん員の武藤さんが、

「そんな時は、どろを根元にかけてあげるといいんだよ。」

と教えてくれました。その通りにしてみるとずっと真つすぐに立ちました。どんどん植えていくと、あつという間に田植えが終わってしまいました。ぼくは田んぼから帰る時、「おいしくなつてほしいな。」と心の中で願いました。

六月下旬に、田んぼを見ると、水がなくなっていました。「干からびてしまったのか。大丈夫なのかな。」と思って本で調べてみると、それが「中干し」という作業だとわかり安心しました。

そして、秋、いよいよしゅうかくの日が来ました。かまを持つて田んぼの中に入ると、田植えの時とはちがつて、地面が固まっていました。ぼくは足のうらで田んぼの土の強さを実感しました。かまで稲を切ると、「ざくつ」といい音がしました。

ぼくたちが育てたお米をしゅうかく感謝祭で学校の人々と食べると、手間をかけて一生けん命作ったお米は、いつも食べているお米よりおいしく感じました。ぼくは、これから家でも祖父母が作ってくれたお米を毎日感謝して食べようと思います。

四年間をふり返って

第二小学校 六年 久家 千夏

「次、農業かー。」

「めんどくさいね。手はよごれるし、畑には虫がたくさんいるし。」

農業を始めた時、私はこう思っていた。でも、農業も、もう四年目。今では、手がよごれたら洗えばいいし、虫も前ほどいやではない。それどころか、「農業は色々なことを学べて楽しい教科」だと思うようになった。

私が、初めて自分達で育てた作物を食べたのは、三年生のサラダパーティーの時。私の家では、庭で祖父と祖母が花や野菜を育てているが、虫や生野菜がにがてな事もあり、

進んで手伝おうとは思わなかった。そんな私が初めて自分で育てた作物を食べた時、

「おいしい。」

という言葉が一番最初に出てきた。その時、私は気がついた。一生けん命育てれば、育てるほど、手間をかければ、かけるほど、作物はおいしいのだと。だから、次からは、いやがらずにやればもっとおいしい作物が育てられる。こういう思いから農家さんはがんばっているのではないだろうかと。

四年生、たくさん野菜を育て、カレーパーティー。私はもう、いやがらなかった。もちろん、虫や土が好きになったわけではないが、おいしい野菜のことを思えば、気にならない。そして考えた通り、カレーパーティーで食べたカレーは最高だった。そしてこのカレーの味が私を、「来年もがんばろう」という農家さんと同じ気持ちにさせてくれた。

五年生、田んぼを借りてお米作り。畑で野菜を育てるよりも大変だった。この大変さから、米の一粒一粒がとてもありがたく、農家さんの苦労と、収穫した時の喜びを知った。

そして、六年生。ネギ、ジャガイモを初めに育て、収穫

後ダイコンとハクサイを育てる。今まで学んだ全てを生かして、小学生最後の農業を楽しみたい。私にとってこの四年間は、農業とは無えんだった私と農家さんとの気持ちを つないでくれた貴重な時間だった。

えいきょう力のあつた農業科学習

松山小学校 六年 加藤 愛梨

小学校最後の農業科学習では、じゃがいもと落花生を育てることに決まり、五月の暖かい日にクラス全員で種いも植えを行いました。じゃがいもも落花生も一度育てているので、やり方も分かり作業もスムーズに行うことができました。いつも感じる大変さよりも楽しさの方が大きかったです。

落花生は、昨年同様たくさん収穫することができましたが、残念なことにじゃがいもは今夏のもう暑により種いもがくさってしまい、収穫することができませんでした。農業をする上で、天気が大きく左右することを今回のことで初めて知り、また農作物を育てる難しさを知り、同時に農業の大変さも改めて感じました。

愛情を込めて育てた農作物が思う様に育たないことがこんなにも残念でショックを受けるなんて今まであまり深く考えたことがなかったもので、今年の農業科学習はとても意味のある学習になったと思いました。

この六年間の農業学習は私にとってとてもえいきょう力があるものでした。実際、農業を体験することによって作る側の大変さや苦勞。そのことを知ることによって生まれる感謝の気持ち。そして自らの手で作ることによって生まれる喜び。それらによって、大きらいだった野菜が今では食べられる様にまでなったこと。作物を作り、育てるという一つのことによっていくつもの物につながり、そしてそのことが自分や周りにおよぼす、えいきょう力のはかりしれないと改めて思い感じました。

一言に農業と聞くとつらくて大変な仕事と思いがちですが、ぜひ私が感じたと同じ様に、多くの人に実際に体験し、そのことによって得られる喜びや楽しさを今度は私が伝え、新たな発見や興味等につながっていくように、私自身がアピールしていける場をみつけ、伝えていきたいと思えます。

初めての脱こくから学んだこと

上三宮小学校 六年 渡部 咲良

「わあ、すごい。」

脱こく機がいきおいよく回っています。今日十一月二日は、みんなで脱こく体験をする日です。稲かりでかりとった稲を学校にもって帰り、かんそうさせたものを使っています。

いよいよ私の番です。足ぶみの脱こく機は、足で板をふみ、その反動で中の機械を回して、もみだけをとりまします。

しっかりと稲を持っていないと、手もいっしょにひっぱられてしまうし、しっかりと板もふまないと、回転が遅くて脱こくする力が弱くなってしまうです。同時にやるのは大変だけど、支援員さんが手伝ってくれたので安心してこの作業をすることができました。

次に、とったもみを「とうみ」という道具に入れ、良いもみと悪いもみにも分けました。よく見ると、良いもみは、ふっくら大きくなっていて、実が入っていないもみは、小さかったり、へこんだりしていました。なぜ回すだけでもみの善し悪しが分かるのか。私は友だちと

「不思議だね。」

と、言っていました。よく見てみると風が軽い物をとばし

ていました。その後、とうみから出たもみをほうきで集め、袋に入れました。脱こく作業は、たくさんのお作業があり、時間がかかって、すごく大変でした。

私はこの体験を通して、農業は一人ではできなくて、みんなで協力してやるのが大切だとはっきりと分かりました。機械でやると、一人で簡単にできてしまいます。今は、コンバインでかりとると、そのまま脱こくできます。あつという間の作業で終わります。

しかし、昔の人のこの作業があつたからこそ今の時代につながっているのだと思います。

みんなで脱こくしたお米は、収穫祭でごま塩おにぎりにしました。機械でかつかんそうさせたお米より、あまみがあつてとてもおいしかったです。手間をかけると、おいしいものができるということが分かりました。

支援員さんありがとう

第三小学校 六年 小野寺 璃来

ぼくは、支援員さんたちにいろいろと感謝しています。

なぜなら、ぼくたちが楽しみにしていた収穫祭ができたからです。教えて下さった中で、野菜の育て方が一番大変でした。

自分達で育てた食べ物を、自分達で収穫したり食べたりするのが幸せだと、ぼくは思いました。だから、ぼくは収穫できるようになるまでがんばってみんなと育ててきました。みんなもがんばっていたので、収穫祭はおいしい、いも汁ができました。そのいも汁は、ものすごくおいしい味でした。それに野菜も、しっかりと実って、みそもいい具合になっていたのです、これは支援員の方のおかげだと思います。

ぼくは、支援員さんたちを見て一つ考えたことがあります。それは、しょう来、農業をやるということです。なぜかというと、ぼくたちのように小さい子ども達に、やさしく野菜の育て方を教えてみたいと思ったこととしょう来農業をやる人を増やしたいという理由です。農業をやっているための勉強を、しっかりとしていきたいいけないな、と思いました。農業のことは、まだあまりわからないことが多いので、今からでも少しずつ本で調べたり、お母さんやお父さんに聞いたり、積極的に体験していきたいです。農家のみなさんは、いろいろな経験をもとにおいしい野菜

を作っていることに強く感動しました。ぼくは、農業科の学習を通して将来農業をやりたいという夢を持つことができました。

農業で生かせること

関柴小学校 六年 遠藤 南未

農業科の活動の中では今までの生活に取り入れると良いことがたくさんありました。人との関わりや、命の大切さなどが今も私の心の中に残っています。

まず人との関わりについてです。私は今年の稲かりで足がぬけなくなっていました。その時には五年生や支援員の人が助けてくれました。ただの私の小さなミスだったのにたくさんの方が助けてくださいました。私の家も農家です。私が四さいくらいの時から、最近まで、春休みや夏休みには、家族と一緒に農業に触れながら楽しく遊んでいました。田んぼは、家族の大切な仕事場でもあり、私の遊び場でもありました。今は、これまでのように楽しいとは思いませんが、これまでの経験を通して、農業には、家族

や地域の人など、いろいろな人との関わりを感じています。それは、一人ではできない仕事、「協力」が必要な仕事であることを意味します。学校で行った田植えや稲刈りの時と同じことを感じました。

命について私が思っていることは、食べ物も生きているということです。農業で作っているお米や野菜、様々な食べ物にも命があります。食べ物という命をそまっにするということは、自分たちの命もそまっにすることになると思います。私は、農業科の活動を通して、様々な命を強く感じるようになりました。

私は、この農業科の活動をしてたくさんのことを学びました。人との関わりを通して命の大切さ以外にも数え切れないほど学ぶことができたと思います。同じに農業のすごさ、農業への感謝の気持ち心が心の中にあふれています。

今までの農業科での活動を生かしてこれからの長い人生を過ごしていきたいです。

たくさんの方に支えられた農業科の学習

熊倉小学校 六年 高畑 綾佳

わたしは、農業科の活動を通して感謝の気持ちを持つことの大切さを学びました。

熊倉小学校では、農業科支援員さんが、わたしたちの農業科の活動を支えてくださっています。

畑作りではうね立ての仕方やマルチ張りの方法を教えてくださいます。家族が農家をしている子も多いですが、実際にうね立てやマルチ張りを手伝っている子は少ないので、ほぼ初心者のわたしたちです。そんなわたしたちに、支援員さんは優しく教えてくださいました。うねはひもを張って均等なばで平行に立てること、マルチは風が入らないようにぴんと張り、はじに土をしっかりかぶせることなど、一つ一つお手本を見せてくださいました。

種まきや苗植えの他にも、植える時の深さや間かくなど、それぞれの作物に合わせて適切な方法を教えてくださいます。わたしたちも、インターネットで育て方を事前に調べましたが、支援員さんの経験を生かした育て方は、とても勉強になりました。

収穫した野菜は、秋に行われる熊っ子まつりでの感謝祭

で、いもじるにして味わいました。わたしたちは、熊っ子まつりでの発表があるので、当日作ってくださるのはPTAの方です。前日から野菜切りなど準備をしてくださいました。そうです。当日も朝早くから調理をしてくださいました。収穫祭では、わたしたちはもちろん、お家の方や地域の方に食べていただくことができました。そんな姿を見て、喜びや達成感を感じました。

わたしたちの農業科の活動は、支援員さんやPTAの方の協力があるからこそだと思っています。たくさんの方に支えていただいたことに感謝して、これからの学校生活でもがんばっていききたいと思います。

芳正さんの大事な言葉

熱塩小学校 六年 高橋 颯

ぼくは、これまでの農業科の中で、心に残った事がたくさんあります。その中でも、農業科支援員さんの言葉が、ぼくの心の中に大きく残っています。

「野菜は作る物ではなく、育てる物だ。」

この言葉は、ぼくが中学年のころ、支援員の小林芳正さんがおっしゃった事です。なぜこの言葉が強く心の中に残っているのかと言うと、ぼくが中学年の時の、農業支援員さんとの対面式の時に、ぼくが農業科に向けてのめあてを、「ぼくは、りっぱでどんな風や雨がきても負けない野菜を作りたいです。」

と、言った後に、次の農業科支援員さんの言葉で、芳正さんが大きな声でこう言いました。

「野菜は作る物ではなく、育てる物だ。」

最初ぼくはなにを言っているのか意味が分からなかったけれども次に芳正さんがやさしく言い始めました。

「野菜は人の手では作れない。でも、野菜が育つ手伝いなら私たちはできる。」

ぼくはその時こう思いました。

「野菜を作る事はできないけれど、育つ手伝いならできる。」

ぼくたちは野菜が育つ手伝いをすればいいんだ。」

と。ぼくはこの言葉を心の中に入れて農作業をし始めました。野菜に水をあげる時も、しっかり野菜を見て、傷が付かないようにしたり、野菜を収かくする時も、かまやはさみなどの刃物で傷が付かないようにしたり、ていねいに収かくしました。

ぼくは、これまでの小学校での農作業の経験などと芳正さんの大事な心で、中学校での農作業や家の畑での野菜を育てるのに役に立てていきたいです。

二回目の興味

駒形小学校 六年 大西 奏唯

ぼくは、今年の農業科では作物の育て方よりもなぜそのやり方でやるのかということに興味を持ちました。

田植えの時に、去年は支援員さんが三本植えが良いと言っていたので何も考えずにただ植えていました。しかし、今年はなぜ三本植えにする必要があるのか、どんな良いことがあるのかが気になりました。ぼくは苗の本数が多ければ多いほど米の数も多くなるのだとばかり思っていました。

今年は、去年の六年生がやったように農業科をふり返って、大きな紙にまとめる授業がありました。その時に米づくりをまとめました。苗の成長などの写真をはったり、その日はいつなのか日付けを書いたりしました。その中で一番気になって、学んだことは一本植え、三本植え、十本植

え、二十本植えの実験の結果でした。六年生全員で米のつぶをかぞえました。そして、一本当たりの米のつぶの数は一本植えが一番多くてびっくりしました。そこでぼくはなぜ一本植えをしないのか気になりました。そして、その理由を考えるために、六年生全員で話し合いをしました。その時には一本植えの方がいいという意見や三本植えの方がバランスがいいという意見などが出ました。その中でたぶん正しいと思ってまとめたのは「一本だと弱くて安定しないから」というのと「三本は次に多く実っていて、一本よりも安定していてたおれにくいから」という意見でした。三本植えにする秘密を自分たちで調べてわかったのでスッキリしました。

今年は去年よりも農業科の米づくりに興味がわきました。やり方は去年とほぼ同じでしたが、一つ一つの作業にちゃんとした意味があると考えてその理由も自分で考えたり、支援員さんに聞いたりしました。今年は米づくりの事を去年よりよく考えて作業できたのでとても楽しく協力して思い出に残る米づくりになりました。

みんなと協力して作ったスイカ

山都小学校 六年 斎藤 楓華

また今年も農業科が始まりました。三年生からやっていて収かくが楽しみでしたが、今年は私の苦手なスイカを育てることになりました。いつもなら「まあ、やってみよう。なにか楽しいことがあるかも。」と思っていたけれど、スイカを思うとどうしてもいやでした。でも、みんなががんばっているのを見ていたら、「いやでもがんばってみよう。」と思いました。

スイカの種を見ると意外に小さくて黒色でした。種は「もうちよつと大きいのかな。」と思っていました。

少し育ってから受粉の仕方を教わりました。かぼちやの時もしたけれどスイカはかぼちやの時よりも、少しめ花が多くありやりやすかったです。全体的に見ると四十個くらいだったので「どの位できるのかな。」と思いました。実の近くには、バネみたいなくきがありました。支えん員さんのお話を聞いたら、それは「まきひげ」といい、雑草を巻きつけるためにあると知りました。スイカは、他の植物とはちがい自分の力で雑草をからそうとしていて、自然の工夫があり本当にすごいと感心しました。

受粉してから数週間経つと、どんどん実が大きくなっていき、つるもどんどんのびてきました。実の近くにあったまきひげがどんどんかれていき、その状態だと収かくして良いと言われました。スイカを収かくしてもよいのかを見分ける時、まきひげがかれているかやスイカを軽くたたき、「ドン」という音が出るといいそうです。支えん員さんがくわしく説明してくれたので、簡単にできました。みんなと協力し、約五十五個収かくできました。少しだけ食べてみると、とても甘かったです。ふだんなら食べるのがとてもいやで残してしまうけれど、みんなと協力して作ったスイカは食べられました。

この四年間ずっと農業科をやってきて、命のありがたみ、農家の人々の苦労がよく分かりました。これからも命や人々に感謝しながら生きていきたいです。

農業科を体験して学んだこと

高郷小学校 六年 清野 咲希

今年で二年目の米作りの体験をしました。一年前の事を

思い出しながら五年生と一緒に学校の近くにある田んぼに行き、田植えをしました。みんなズボンをまくり田んぼに入り三、四本ずつ苗を持って真つすぐに植えました。田んぼの土はドロドロで足がうまり転びそうになりました。誰ひとり嫌がる人もいなく積極的に田んぼの中に入り支援員の武藤さんに指導を受けながら行いました。とてもいいねいに教えてくださったのでわかりやすかったです。私は真つすぐに植える事ができてうれしかったです。みんなも顔にどろがかかったりして頑張ったおかげで一時間もかからず植えることができました。思わず小さくガッツポーズして達成感を味わいました。

夏には、弱々しい苗も太陽の光をいっぱいあびて青々とピンと立って大きくなっていました。元気のいい稲です。穂も生成してたれ下がっていました。

いよいよ十月稲刈りの時期になりました。稲刈りを楽しみにしていたので私はわくわくする気持ちで止まりませんでした。みんな一人一人かまを持ち、とても速く稲をかって作業していました。私も負けず手を切らないように気をつけながら頑張りました。ざくっざくっとおもしろくかる事ができました。友達も笑顔で収穫を喜んでいました。

日頃何気なく食べているごはんは、一年かけてできる米

です。一粒も残さずに食べたいと思いました。口に入るまで世話をしながら育てて私達の身になっています。苦労してできた米に感謝したいです。私は祖父母が汗水流して作っている米を食べて成長しています。祖父、祖母にも感謝したいです。感謝しながらお米を食べたいです。もしも、米をつくる人がいなくなってしまうと私たちは米を食べられなくなってしまうます。人間が生きていく中で一番大切なのは、お米だと感じる事ができた米作りでした。

平成 30 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】

(敬称略)

関東学院大学教授
喜多方市教育委員会教育長

佐藤 幸也
大場 健哉

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長
喜多方市 P T A 連絡協議会長(姥堂小学校 PTA 会長)
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査
会津よつば農業協同組合いいで地区本部 地域農業振興課長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市農業委員会委員
喜多方市産業部農業振興課長

阿部 秀樹
手代木 洋一
半澤 勝拓
松葉 隆幸
菊地 善一郎
山田 義人
岩渕 善一郎
大堀 邦英

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科担当

佐藤 毅
中村 豊子
久保 幸恵

編集後記

平成 21 年度から始まった「喜多方市小学校農業科作文コンクール」も今回で 10 年目を迎えます。応募作品 1427 点の中から選ばれた 45 品はどれも大変素晴らしい内容で、審査会でも審査員の方々が口をそろえて「子どもたちの素直な気持ちが伝わる作品揃いで、素晴らしい！」と大絶賛でした。

作品の内容はお米のことや野菜に関すること、種を植えた時や収穫の時の苦労や喜びなど様々ですが、多くの作品に共通している言葉は、「支援員さん」です。支援員さんからの農業に関するお話に真剣に耳を傾ける子どもたちの姿や、支援員さんから教えていただいた言葉や褒められた言葉等、子どもたちと支援員さんとの関わりを、多くの作品から読み取ることができました。子どもたちは農業科の活動で試行錯誤を繰り返しながらも、支援員さんに助けられながら着実に一步步ずつ成長し、農業科を通して「豊かな心」、「主体性」、「社会性」を確実に身に付けるとともに、自分たちの住む地域やふるさとである喜多方の良さを改めて認識することができました。このように今の農業科においては、支援員の方々や地域の皆様の存在は絶対に欠かすことのできないものになっています。

来年度もまた、支援員の皆様をはじめ地域の多くの方々にお世話になることと思いますが、喜多方市の子どもたちが、農業科を通して新たな発見や喜び、感動と出会えるようご協力をお願いいたします。そして、おいしい農作物とともに感動に満ちあふれた素晴らしい作文に表現し、農業科を日本全国に誇れる素晴らしい教科にしてくれることを心より期待しております。

(学校教育課 課長補佐・指導主事 佐藤 毅)

平成 30 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 31 年 2 月 発 行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会